

I V S I (国際スキー指導者連盟) 近況報告

I V S I (国際スキー指導者連盟) は世界のアマチュアスキー指導者の団体である。今この団体が目指している方向性は何であろうか？それは、ホピヒラー教授亡きあと求心力を失った世界のスキー指導者に対して、再び強力な理想を与えてその求心力パワーを復活させることが第一の目的である。第二の目的は、グローバルなトレンドに着目し、スポーツ・フォア・オール運動を世界の五大大陸で推進しようということである。人は誰もがそこに雪がありスキーがしたいと思ったらそれが具現化されねばならない、苦しい世界的な不況の中でも私たちはこの理想を強く主張する。そして、第三に、アマチュアの指導者が奮起し、指導者がその量的・質的向上をはかり、またスポーツクラブが効果的にオーガナイズされて組織化されたスキーヤーが増大してはじめてスキー界は発展するという固い信念である。

ノルウェイ人のみは神話でスキーを履いて生まれてくると豪語しているが、人は誰でも最初はスキーの初心者である。その初心者の時にスキーへの感動(ファッション)、夢(ファンタジー)そして愛と冒険心といういわばスキーの命というか生きる力が醸成されなければならない。

私たちは4年前、ノルウェイの大雪原のスキー場バイトストーンでホピヒラー教授を失い、ともすると滅入りがちなこの時のことを話し合った。もちろん、この音頭をとられたのは今は亡きクルト・クライセルマイヤー、インタースキー会長である。クライセルマイヤー会長はこう述べた。

「かつてはスキー界の法皇ともいべきシュテファン・クルッケンハウザー教授の強力な個性、人となりによりインタースキーはスキーヤーやスキー指導者にとって、太陽のような存在となった。娘婿のホピヒラー教授もこの路線を踏み、サン・アントン及び野沢の大会は素晴らしいものとなった。」「しかし人間がひとりではないうることに限界がある。私も年長ながら一期だけはインタースキーの会長をして、再びエネルギーを失いかけて失速状態になっているインタースキーを再び活性化しようと思う。」と強い決意で述べられた。「それは我々アマチュアが後に続く人々にとって捨て石となる」ということがクライセルマイヤーさんの信念であった。おそろしく真面目な立候補演説であった。そして当選するやいなやクライセルマイヤー氏は矢継ぎ早に改革を進めた。ひとつは総会中心のマネージメントでなく(これだとなかなか意見調整が難しい)、スモールガバメントによる強力なリーダーシップである。クライセルマイヤー氏は、ドイツ、オーストリア、スイス及び北欧の結束を呼びかけ、今迄しばしばダッチロールした仏と伊に対しても協力を呼びかけた。

結果として会長1名(クライセルマイヤー)、副会長(第一副会長)はスエーデンのキール・ルーダー、副会長(第二副会長、次期開催国)はスイスのカール・エッゲン。そして三部会の会長がそれぞれ理事となった。I S I A (国際職業スキー教師連盟)はスイスのリード・カンベル、I V S I (国際スキー指導者連盟、アマチュア)は、ドイツのアルフレッド・ジークルト、そしてI V S S (国際学校スキー教師連盟)のゼップ・レードルはオーストリア出身である。これに事務局長にフランク・ルイトンを招き、ここに鉄壁の中欧アルペン及びノルディック連合政権が成立した。クライセルマイヤー氏は更に主張した。「昔のツールズでのインタースキーのように暖かい雰囲気のあるスキーの良さを味わえるのは個々の三部会で、そして世界のスキー界を統合する情報交換や交流はインタースキーの総会で」という考え方である。キール・ルーダー氏は見事にこの戦略のセコンドをつとめた。

ところがクライセルマイヤー氏は偉業半ばにして急逝した。私たちは再びここに困難を迎えたのだった。ルーダー氏は名セコンド、しかし北欧代表である。ここは何としても、スキーの宗主国オーストリアが主導権をとらねばならない。しかし、ドイツ等はルーダー氏のクライセルマイヤー氏逝去後の尽力についても感謝せざるを得ず、票は割れた。

しかし結果的に間一髪のところで一票差で再びオーストリアのメルマー氏がインタースキーの会長となった。そして、次期開催地は、韓国となったのである。強力なリーダーシップとグローバルマインドは共に達成された。あとはスキー指導者が一丸となって切磋琢磨し、量的・質的レベルアップをはかるのみである。これらのオーガナ

イズを中心にサポートしたのが、I V S Iのフリッツマーレス副会長である。そして日本の政治力がなかったらこれは達成されなかったろう。スキー教育界はこうして良くも悪くも卓越した巨人リーダーのコンダクトから賢者グループによる集団のチームワーク・リーダーシップへと移行した。

I V S Iはこれらの流れの中でまず自分たちの組織強化を図るため、国際的な養成と既定の委員会をオーガナイズし、バジテストなどの能力テストの見極めと国際比較など今迄タブーであった領域へと踏み込んだ。それと共に和気あいあいとした楽しいスキースポーツを通じての国際的な友情や交流の具現化をアマチュアの大会では目指している。二年前久し振りにザコバーネで行われた大会はポーランド人の全面的協力により好ましい大会となった。そしてインタースキーには、IT時代においてスキーはどういう風にプロモーションすべきかについて下支えとなる専門レクチャーを6本発表した。それは、ウェルナー・バルトレ(ドイツ)による「EUにおけるスキー指導者像をさぐる」について、福岡孝純(日本)による「現代社会におけるスキーの社会的文化的役割」、フランク・ルンド(デンマーク)による「スキー・マジック」、ヘルマン・ワルナー(オーストリー)による「ターン(カービング)」、ヴォルフガング・ワーグナー(ドイツ)による「スキーツアーのリスク・マネジメント、雪崩について」などである。

次回のI V S Iの大会は二年後に久し振りにオーストリアのレツヒに里帰りする。これはツールズで第一回目のインタースキーが1946年に始まったことを考えると誠に意義深いものがある。インタースキーの始まりはどちらかという職業教師のリーダーシップで始まった。そして現在は、三部会、そのスケールの違いこそあれ、それぞれ特異性を発掘し、ハーモニックに又シンフォニックに活動をする素地は整えられたといえよう。今後はネット世代にスキーの素晴らしさをどう伝えてゆくか、ということ、また、ますます巨大化する大会に対応して財政的にどのような対応をとるか、ということがその課題といえよう。



I V S I (国際スキー指導者連盟)
副会長 福岡孝純